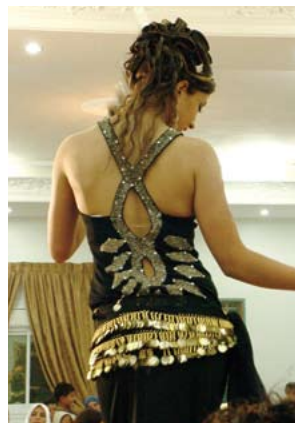


変容するパレスチナの婚姻事情

錦田愛子

にしきだ あいこ / 早稲田大学、AA 研共同研究員

新郎・新婦が乗るウェディング・カー。



結婚式のお色直しの最後は、必ず黒い衣装で締められる。



花嫁の手に描かれたヘンナの模様。



結婚式ではやはり純白のウェディング・ドレスが主流。



床入り式の翌朝の祝い「サバーヒーヤ」の料理。娘の処女証明が確認された祝いでもある。



パレスチナを夏に訪れ、もっとも多く遭遇するイベントは、結婚式である。乾季にあたる夏は、長期休暇を利用した相互訪問が盛んになるシーズンだ。ほぼ毎日のようにどこかで結婚式が開かれ、知人の家を訪ねると、彼らの親族や隣人の式に誘われることも多い。本稿では筆者がこれまで見てきた式や慣習を、故大塚和夫の分析による下エジプトの事例（『下エジプトのムスリムにおける結婚の成立過程—カリュービーヤ県ベンハー市とその周辺農村の事例を中心に—』『国立民族学博物館研究報告』10巻2号、273-307頁、1985年）や、日本の結婚を念頭におき振り返ってみたい。

中東アラブ諸国でイトコ婚が多いことは、広く知られている。特に父方オジの娘との結婚は、「ピント・アンム婚」として現在でもパレスチナ、ヨルダンなどで散見される。遺伝学的に問題視されがちな近親婚ではあるが、むしろ彼らの間では、「身内の者」との結婚として親族の間の結束を強める役割を期待され、肯定的に評価されることが多い。

だが一方では恋愛結婚も存在し、親の反対を押し切って好きな相手と結婚に至る例もある。ただそのプロセスが、兄弟や親族男性の口添えを紹介に利用するなど、父系社会の慣習にのっとって運ばれる点は、日本とは異なる特徴といえる。

めでたく結ばれるに至った縁談は、結婚契約書を交わすことで法的に成立する。契約に際しては、花嫁に贈られる婚資（マフル）の金額や金装飾品の量などが話し合いで決められる。それから結婚式までに、花嫁が用意した新居に婚資で家具をそろえ、新婚生活の準備が進められるという一連の過程は、下エジプトの場合と同じである。パレスチナ独特と思われるのは、嫁入り支度の際に花嫁が、アラビア語で「トゥラース」と呼ばれる手縫いの伝統刺繍のドレスを数着用意することである。かつては祝宴などで着られたそうだが、最近の若い世代は洋風ドレスを好むため、筆筒の肥やしとなってしまふことが多い。この辺りは日本でいう和服の扱いに近いといえるかもしれない。

婚礼は、前夜祭を含めた数段階に分かれて行われる。筆者が調査を行ったヘブロン郊外の村では、「ラヤーリー」と呼ばれるパー

ティーが、結婚式の数日前の晩から花婿宅で開かれていた。夜の8時頃に平服で集まった親族や隣人たちは、男女別々の部屋でダブル（鼓）の音に合わせて踊る。持ち寄られた贈り物はアルミ製の直径50センチはある皿の上に盛られ、女性たちはその皿を頭に載せて踊る。ブーゲンビレアやジャスミンの花、たくさんのロウソクなどで飾られた皿は、見るからに重そうだが、年配の女性などは丸めたスカーフを頭との間に挟み、うまくバランスをとり両手を広げる。祝いの席で来客を踊りに誘うのは、ホストの責務でもあり、もてなしの一部だ。

ラヤーリーの最終日には、「ヘンナ」の祝いが開かれる。ヘンナとはミソハギ科の低木で、葉からとった染料はインドなどでも肌の染色に用いられる。大塚のいう「床入り式」（上掲書）の前日にあたる晩、花嫁は式場での短い祝宴の後、実家に戻って手や足にヘンナで模様を描いてもらう。伝統刺繍と同様に、ヘンナにもたいてい親族や隣人の中に名人がいて、夏にはひっぱりだこになる。そして当日の朝になると、花嫁は朝から美容院に行き、髪とドレスを調える。これでパレスチナ版ブライダル・エステは完成だ。

結婚式への道のりは、賑やかなクラクションの音で始まる。新郎新婦を乗せた車は、生花やリボンで豪華に飾り立てられ、新婦の家を出発する。後には親族の乗った車が数台から十数台続き、空に鳴り響くクラクションは夏の風物詩ともいえる。到着した結婚式場は男女別の会場に分かれており、ふたりはまず女性側のホールに入る。こちらに入るのを許される男性は新郎のみだ。中では大音声のスピーカーで流れるアラブのポピュラー音楽に合わせて親族がステージで踊り、ウェディング・ケーキへの入刀が行われる。終盤に近づくと、花嫁は羽根で飾られたクルアーン（コーラン）を両手に持って踊り、新郎の手による「タルピース」（下エジプトでは「シャブカ」）と呼ばれる金製装身具の贈与などが行われる。

こうした過程を見ていくと、パレスチナの結婚式や縁談は、西洋とアラブ、伝統と近代、イスラーム、ポピュラー・カルチャーなど多くの要素が織り込まれていることが分かる。どの要素が重視されるかには地域差もあるが、最も大切なのは本人と両家の家族の意向である。古今東西、事情は同じ、婚姻は親族間の最大のイベントであり、関心ごとといえるのかもしれない。